

# 愛の啓示——ノリッジのジュリアン：試訳—その1\*

内桶 真二

## 2

### 第2章——これらの啓示の時期について、およびいかに彼女が3つの祈願をしたか。

以下の啓示は、西暦 1373 年の 5 月 8 日、教養のない素朴な者に与えられたものです。以前にその者は神に 3 つの恵みを願いました。第 1 は受難の際の心持ち、第 2 は 30 歳という若さでの肉体的な病、第 3 は神からの恵みとして 3 つの傷を受けること。最初のものについては、キリストの受難についてある程度感覚は持ち合わせているのではないかと自分では思っておりましたが、神の恩寵によってさらに知りたかったのです。私はその時に、マグダラのマリアや、キリストを愛する他の人々と共にいたかったのです。そうすることで実際に直接この目で見て、我らが救い主の肉体的な苦しみや、その時に主の苦痛を目にした聖母マリアや、主をまことに愛した人たちの思いを、もっと知りたかったのです。そうすれば私もそういった人々の一員となり、主とともに苦難に臨むことができましょう。他の幻視や神の啓示は、私の魂が肉体を離れるまで決して望みはしませんでした。このように願ったのは、啓示の後に、キリスト受難のより十全な意味を知ることができるのではないかと考えたからです。第 2 のものは悔悟とともに心に浮かびました。死ぬほどの重い病にかかり、その病のなかで聖なる教会のあらゆる儀式を済ませ、自分も死を覚悟し、私を見る人たちもそう思うようにと、自ら願ったのです。なぜなら、私は今生のいかなる安逸も欲してはいないからです。この病で、霊が肉体から旅立つことだけは除いて、悪魔の恐怖や激しい誘惑、死ぬ時に経験するであろう肉体的そして霊的なありとあらゆる苦痛を請い願いました。そして私はこれによって、神の恩寵を得て自分が清められ、後にその病を得たことで一層神の栄光のために生きたいと思いました。そしてそれが死を迎えるよい準備になるであろうと。なぜかという、私はすぐにも我が神と一体になることを欲していたからです。受難と病という二つの願いを、私はある条件のもとに欲しました。すなわち、「主よ、あなた様は私が欲するものをご存知です。もしそれをかなえることがあなた様の御心にかなうのであれば。そしてもし御心に反するものであっても、どうぞ主よ、お怒りにならないで下さい。私はあなた様が欲するもの以外は何も欲しないのですから」3 番目のものについては、神の恩寵と聖なる教会のお導きによって、生涯のうちに 3 つの傷を受けたいと切に請い願うようになりました。つまり、まさしく悔悟の傷、自然な思いやりの傷、そして一心に神を請い求める傷。この最後の願については、私はいかなる条件も付けませんでした。前述の 2 つの願いは私の心から忘れ去られてしまいましたが、3 番目のものは絶えず心の中にありました。

## 請い願い神から得た病について——第3章。

そして私が30歳と半年の折、神は私に3日3晩床に伏す肉体的な病を授けて下さいました。そして4日目の夜、私は聖なる教会のあらゆる儀式を済ませ、夜明けまで生きながらえることはあるまいと思いました。そしてその後、2日2晩、私はもがき苦しみました。そして3日目の晩、私は幾度ももう死ぬんだと思いましたし、私のそばにいてくれた者たちもそう思っていました。ですが、まだ若かった私は、とても死ぬのがいやでした。とはいえ、なにかこの世のもののために生きたいというわけでも、苦痛を恐れるからというわけでもありませんでした。なぜなら、神のお慈悲を疑ってはおりませんでしたので。生きて神をさらに愛し、もっと長く愛したかったからなのです。そうすれば、神をもっと知り、天上の恵みの中で神の愛をもっと知ることができるでしょうから。なぜなら私がこの世に生を受けている期間は、永遠の至福と比べるととても取るに足らなく短いもので、無だと感じたからです。ですから、私は思いました。「善き主よ、私が生きていてももはやあなた様のためにはならないのですか」そして私は痛みの感じ方から考えて、自分は死ぬのだと悟りました。そうして、そこで心の限り神のご意志に従うことにいたしました。そのような具合でなんとか夜明けまで持ちこたえましたが、夜が明けると下半身の感覚が失われ下肢が麻痺していました。それから、当て物を下に入れて上半身を起こした方がよいだろうということで、身を起こしてもらい、神のご意志を受け入れるにあたって胸が楽になり、命の続く限り神のことを思っていました。最後の時のために私の司祭が呼ばれ、その方が来るころには私の目は動かなくなり口もきけなくなっていました。司祭様は私の面前に十字架を捧げ、おっしゃいました。「ここに汝の造り主であり救い主であるお方の像をお持ちしました。ご覧になってお心をお鎮め下さい」私は大丈夫だと思いました。というのも私の目は神の慈悲に導かれ私が行くに違いない天国をしっかりと見つめていたからです。それにも関わらず、私はできるのなら十字架の表を見てみようかと心に決め、そうしてみました。真上を見つめるよりは正面を見る方が長続きしそうな気がしたからです。この後、目が見えなくなり始め、部屋の私の周りが夜のように真っ暗になりましたが、十字の像だけは明るく、どうしてかはわかりませんが私はそこに陽光を見ました。十字架の周り一帯は恐ろしく思われました。まるであたり一面に悪魔たちが大勢集ったかのようでした。それから、上半身も感覚を失い始め、息苦しくなり、一向に何も感じなくなりました。本当に私は死ぬのだと思いました。そしてそのうちに突然痛みが取り去られ、上半身が以前と同じように元気になりました。私はこの急激な変化に驚き、神の密やかな御業に違いない、自然なものではないと思いました。このように楽にはなったのですが、私はもっと生きたいとは決して思いませんでした。そのように楽にはなってはおりましたが、決して完全に楽になったわけではなかったのです。なぜなら私はこの世から解放されたかったのですから。そのとき急に、我らが主の恩寵にあふれた恵みとしての第2番目の傷を望むべきだ、主の神聖な受難の記憶と感覚で私の体を満たしたい、という思いが心に浮かびました。私は主の痛みを、深い同情をもって自分のものとし、それから神を請い求めたいと思ったのです。ですが、決して神の姿を見たいとか、神の啓示を願ったことはありません。ですが私が望んだのは、自然な魂が我らが主イエスに対して持ち得る深い同情です。そのお方は、愛のために死すべき定めにある人

間となられることを欲されたのです。ですから、私はそのお方とともに苦しむことを願ったのです。

#### 4

ありがたきキリストの戴冠の第1の啓示の始まりなど、すなわち初めての章。そして神がいかに大きな喜びで心を満たして下さるか。また神の大いなる謙虚さとキリストの受難を見ることが、ありとあらゆる悪魔の誘惑に対してどれほど十分な力となるか、そしてありがたい聖母マリアのこの上ない素晴らしさと謙虚さについて——第4章。

そのうち、突然私は冠の下から赤い血が滴り落ちるのを目にしました。熱く新鮮でそして大量に。まるであたかもありがたき御頭に茨の冠が押し付けられた受難の時のように。神でありまた人でもあるお方、そのように私のために苦しみを受けたお方の。そのお方自身が直々に私にお示しになられたのだと、とても強く直感しました。そしてその啓示を見ていると、急に三位一体神が私の心をとつともなく大きな喜びで満たして下さいました。そして私は三位一体の神はいつも天国にいらっしゃり、そこに来る者皆を待っているのだと理解しました。というのも、三位一体神は神であり、神は三位一体神であり、三位一体神は我々の造り主であり庇護者であり、三位一体神は我々が永久に愛するお方であり、永遠の喜びであり恵みなのです。我々が主、イエス・キリストを通じて。そしてこのことは第1の啓示と、またすべての啓示において示されました。なぜなら、私が思うに、キリストが現れるところではありがたき三一神が理解されるべきものだからです。そして私は、「主がたたえられますように」と言いました。私がそう言ったのは、私の心にある畏敬の念からで、私はそれを大声で申し上げました。そしてとても不思議でたまらず、驚嘆しました。主ほど尊くもつたいたないお方が、私のようなみじめな肉体を持った罪深い人間とこんなにも親しく接して下さいものだとは。これは、私が誘惑される時のためのものだとして理解しました。というのは、神のお許しがあれば、私は死ぬ前に悪魔たちの誘惑を受けるかも知れないからです。このありがたい受難の啓示を目にしていれば、私の心の中で見た神性と相まって、私にとっての十分な力になるということがよく理解できたからです。そうです、私にとってだけではなく、あらゆる生きとし生けるものにとって、地獄の悪魔たちと霊的な誘惑に対して。この時、神は我々が聖母を私の心に見せて下さいました。私は彼女を普通のお姿で霊的に見ました。無垢で謙虚な女性で、お若く、子供よりもちょっと背がお高い程度。身籠ったときのお姿でした。また神は聖母の魂の英知と真実をいささか見せて下さいました。神のお造りになられた取るに足らない人間から神がお生まれになることに、大いなる畏れを抱きおののきながら、聖母が造り主である神を見つめる尊い視線を私はそこに見て取りました。そしてこの英知と真理が、すなわち造り主の偉大さと造られた己の卑小さを弁えていることが、聖母にとっても謙虚に天使ガブリエルに、「え、神が造りたもうた私が」と言わせてのでした。この光景を見て、聖母が美徳においても恩寵においても、神が彼女の下にお造りになったすべてのものよりも秀でていてということを私は真に理解しました。というのも、彼女の上に造られたものはなにもなく、ただありがたいキリストの人性があるのみだ、と私の目には映ったからです。

神は我々を優しく包み込みながら、我々にとっていかに善きものすべてであるか。そしてすべての創造されたものは、全能の神に比べれば無であること。また自らを無にし、神の愛のためにすべてを捨て去るまで人に安息は訪れないこと、について——第5章。

この同じ時に、我々が主は近い愛の光景を私に霊的に示して下さいました。我々にとって主は善きものと慰めのすべてであることを見ました。主は愛で我々を包んで抱擁して下さいました。主は我々を優しい愛ですっかり包んで下さり、決して我々のもとを離れることがなく、私の理解によれば、我々にとっての善きものすべてなのです。またこの時、主は私の手の中にある小さなものを、ハシバミの実ほどの大きさのものを、見せて下さいました。それは玉のように丸いものでした。私はそれを理性の目で見つめ、考えました。「これは一体なんでしょう」とすると次のような全般的な答えが返ってまいりました。「それは造られたものすべてなり」私はそれはいったい存在し続けることができるのだろうかと思いましたが不思議に思いました。というのも、私にはそれがほんの些細なことで突然に無に帰してしまうのではないかと心配されたからです。そして心の中に答える声がありました。「それは存在し、そしてあり続ける。神がそれを愛するが故に。そして存在するあらゆるものは神の愛によってあり、またあり続けるのである」この小さきものの中に私は3つの特質を認めました。第1は神がそれを造りたもうたこと。第2は神がそれを愛しておられること。第3は神がそれを養っておられること。しかし私にとって、造り主、養い主、愛して下さい下さる方とはなんなのか、本当のところは私には分かりません。というのは、神と私が本当にひとつになるまでは、私は完全な安息や全き幸福を得ることができないからです。つまり、私が神にしっかりと結びつけられ、私と私の神との間に何の創造物もいっさい介在しなくなるまでは。永遠である神を愛し受け入れるためには、我々が被創造物の取るに足らなさを知ることが、そして造られたものすべてを無に帰することが必要なのです。なぜかという、このために私たちは心と魂の完全な平安を得られないからです。我々はこの世でこのような取るに足らないものに安息を求めますが、そこには安息はありませんし、全能で英知に富み全き善である神を知ることありません。なぜならば神がまさに安息であるからです。神は知られることをお望みになり、我々が神に安息を見出すことを好まれます。というのも、神以下のものは我々には十分なものではないからです。そしてこれが、いかなる魂も造られたものすべてを捨て去るまで安息を得られない理由なのです。愛のために、すべてである神を受け入れられるようにと、自ら欲してすべてを捨て去った時、その時になってはじめて人は霊的な安息を手にすることができるのです。また、我々の主である神は取るに足らぬ者が、飾らず、取り繕わず、率直に神のみ元を訪れることをとても喜ばれます。それが、この啓示において私が理解したところによれば、聖霊に触発された魂の自然な望みだからです。「神よ、あなた様の善性から私にあなた様自身をお与え下さい。あなた様は私にとって十全なお方であり、私はあなた様の誉れに十分に見合うもの以外は何も望みはいたしませんので。もし私が何かそれ以下のものを望むのであれば、私にはいつも欠けているものが生じてしまいますが、私が全てを手にするのはあなた様においてだけなのです」この言葉は魂にとって実に素晴らしいもので、また神のご意志と善性の核心に迫るものなのです。なぜなら神の善性は、神のすべての創造物、神のすべての御業を

包み込み、際限なく流れているからです。なぜなら神は無限性そのものだからです。そして神は自ら独力で我々をお造りになられ、ありがたき受難によって我々を救い、我々をありがたい愛の中に養って下さっています。そして、このことはすべて神の善性によるものなのです。

## 6

**我々はいかに祈るべきか。主を知り、主を愛することに邁進することを願いつつ、人間の魂に対して我々の主が持っている大きく優しい愛を求めながら——第6章。**

この啓示は、神の善性に賢明におすがりすることを我々の魂に教えるために示されました。そしてその時、我々の祈り方のことが思い起こされました。愛を知り理解することが不十分なために、いかに我々はさまざまな願い事をするようになってきていることか。そして、考えうる限りのさまざまな願い事をするよりも、愛について正しく堅固な理解をし、神自身に神の善性を請い願い、恩寵にすがることが神にとってより誉れであり、より正しい喜びであることを私は理解しました。というのも、もし我々がこうしたありとあらゆる願い事をしたにしても、神にとっては取るに足らないことであり十分な誉れとはならないからです。しかし神の善性の中にはすべてがあり、そこに足りないものは何一つありません。なんとなれば、後に述べるように、同時に私の心に次のように浮かんだからです。我々は神の聖なる肉と貴重な血、聖なる受難、高貴な死と傷とを神に請い求めます。そしてこれら全てから我々が手にするあらゆるありがたき慈悲、永遠の生命は神の善性なのです。そして我々は神をお生みになられた素晴らしき女性の愛を求めて神に祈り、その女性から我々が手にする救いは神の善性からのものなのです。そして我々は神が死した聖なる十字架に掛けて祈り、我々がその十字架から手にするありとあらゆる力と救いは、神の善性からのものなのです。そして同様に、特別な聖者と天国の祝福された一団から我々が手にする救いのすべて、彼らから我々が受けるありがたき愛と永遠の友情、これもまた神の善性からのものなのです。というのも、神は善性から我々を救うための仲介者をとても素晴らしく数多にお定めになったからです。その中でも中心で重きをなす仲介者は、神が処女マリアから受け継いだありがたい性質であり、その他にそれよりも前とそれ以降の我々の購いと永遠の救済を司る仲介者たちがいるのです。ですから、神があらゆる善であることを知り理解した上で、我々が仲介者を通じて神を求め崇拜することは神の意志にかなうことなのです。なぜなら、神の善性は至高の祈りの対象であり、我々のどんな些細な求めにも応えてくれるものだからです。それは我々の魂を生き生きと蘇らせ、良心と徳を増加させます。そのような魂はもっとも自然に近く、もっとも恩寵を得やすいものなのです。なぜならそれは魂が求め、そのお方自身の中に我々をすっかり包み込んでおられるまさにそのお方を本当に知るまで、今後も求め続けるものとまさに同じ恩寵であるからです。なぜなら神はお造りになったものにはいかなる悪意も持ってはおられず、また我々の肉体に自然に備わっている素朴な役割に関して我々を手助けすることを、自らの似姿に造られた魂への愛ゆえに、軽んじてはおられないからです。なぜなら、肉体は服に包まれ、肉は皮に、骨は肉に、そして心が体に包まれているように、我々もそうであって、魂も肉体も神の善性に包まれ我々はその内側にいるのです。そうです、そしてより親密にと

いうのも、これらのものはみな腐り消滅してしまいますが、神の善性は常に全きものであり、比類なく我々に近いものなのです。それはなぜなら、我々を愛して下さるお方は我々の魂が全霊を持ってそのお方を請い求め、我々がそのお方の善性を常に請い求めてやまないことを願っておられるからなのです。なぜなら、心が考え及ぶものの限り、そうすることがもっとも神の思し召しにかない、もっともたやすくかなうことだからです。それは、我々の魂は至高のお方によって特別に愛されているので、そのことはあらゆる生き物の理解の埒外にあるものだからなのです。つまり、造られた生き物のうち、我々の造り主がどんなに強く、清らかに、そして優しく我々を愛して下さっているか知ることができるものは皆無なのです。ですから、神の恩寵と救いを得て、全能の神が我々に対して持っている高貴で溢れんばかりで、計り知ることができない神の善性からくる愛を、我々はただただ永遠に驚愕しながら立ち尽くして霊的に見つめることとなるのです。よって、我々は敬意を持って我々を愛して下さるお方に欲するものすべてを乞うことができるのです。なぜなら我々の自然な願いは神を受け入れることであり、神の善き願いは我々を受け入れることだからです。そして我々は全き喜びのうちに神を受け入れるまでは、願うことも欲することも決してやめることができません。その時になって初めて更に願うことを止められるのです。なぜかという、神は我々が天上で満たされるときまで、知ることに努め愛し続けることを欲しておられるからです。このようなわけで、後にご覧になるように、あとに続くものとともに、この愛の教えが示されました。というのも、最初の啓示においてその力とすべての根幹が示されたからです。あらゆる事柄のうちで、造り主を見つめ愛することが、自らの魂を最も小さきものに見えさしめ、敬虔な畏れと真の謙虚さで魂を最大限に満たすものだからです。溢れんばかりの同胞のキリスト者への愛を伴って。

## 7

**マリアは造り主の偉大さを見つめながら自分がいかに取るに足らないものと考えたか、そして茨の冠の下から流れ出る流血について、また人間の最大の喜びは、もっとも気高く強大な神がもっとも神聖でもっとも慈悲深いこと——第7章。**

このことを我々に教えるために、我々が神は同時に私の心に聖母マリアをお示しになられました。つまり、いと偉大で気高く強大で善である造り主を見つめた際に、聖母マリアが手にした天上の英知と真理をお示しになられました。神を見つめる際に感ずるこの偉大さとこの気高さによって、マリアは敬虔な畏れで満たされ、そしてこれによって、神と比べて彼女は自分自身をとて小さなもの、とても卑しいもの、とても単純で哀れなものと考え、その結果、この敬虔な畏れによって彼女は謙虚さで満たされました。そしてこのため、彼女は恩寵とあらゆる徳で満たされ、全ての人に勝るのです。神がこの今述べたことを霊的にお示しになっている間中ずっと、私は頭からたくさんの血が絶え間なく流れ出る肉体的なお姿を目にしておりました。たくさんの流血が冠の下から小さな玉のようになって滴り落ち、まるで血管から溢れ出しているようでした。溢れ出て来る際に血は赤茶色でした。血の濃さのためです。そして広がっていくと血は深紅になり、眉のところに来ると忽然と消えてしまいました。それにもかかわらず出血は続き、多くのことが示され理解されました。

その光景は、美しく生き生きとして、まさに出血そのもの。出血の豊富さは、激しいにわか雨のあとにひさしから落ちる、人知によっては数えられないほどの雨だれのように。そして額に広がっていくときの丸さは、まるでニシンの鱗のよう。その時、これら3つのことが理解されました。出血の際の小石のような丸さ。額に広がっていくときのニシンの鱗のような丸さ。ひさしから落ちる雨だれの数えられないほどの豊穡さ。この啓示は生き生きとして、またおぞましくもあり、甘美でもありました。目にしたのものの中でもっとも私の慰めとなったことは、我々の神であり主であるお方はとても尊く恐ろしいお方ではありますが、またとても身近で慈悲深いお方であるということでした。そしてこのことが私の魂をとて慰め安堵させました。そして、このことを理解するために神は以下の明白なたとえをお示しになりました。厳肅なる王、あるいは偉大な君主が、取るに足らない使用人に対して親しく接すれば、それは最高の誉れとなる。つまりもしそれを良心から、喜んで、陰に陽に、自ら示せば。そうすればこの身分卑しき者もこう考える。「嗚呼、この素晴らしいお殿様が、私のような取るに足らない者にこれほどの信じがたい親しみをお示しになることよりも、より誉れ高く喜びとなるものがあるだろうか。本当のところ、殿様がそれだ贈り物を下さり、ご自身は他人行儀なお振る舞いをなさるより、親しみを示して下さる方が私にははるかに喜ばしく嬉しい」この具体的な例は大変な高みから示されるので、この大いなる親近感ゆえに人の心を奪い、喜びのあまり自分を忘れさせてしまうであります。同じように、そのことは我々が主イエスと我々についても当てはまるのです。というのも、私が思うに、もっとも高く強大で気高く立派である神が、もっとも低く謙虚で身近で慈悲深いということは、まさに可能な限り最上の喜びなのです。そして実にこの驚くべき喜びは神を見る際に我々みなに示されるものなのです。そして我々が主はこれを望んでおられるのです。主の恩寵と助けによって我々がまさにそれを目にするまで、我々ができる限りそれを欲しそして信じ、喜び歓喜し、自らを慰めそして安堵することを。というのも、私が思うに、我々が持つもっとも完全な喜びとは、我々の兄弟、救い主である主イエス・キリストの中にいらっしゃる、造り主である我々の父の、驚くべき慈悲深さと身近さなのです。しかしこの驚くべき身近さは、我々が主による特別な啓示か、あるいは聖霊によって内的に与えられるあり余るほどの恩寵によらない限り、この世では誰も知ることが出来ないものなのです。ですが、神の愛に対する信仰と信念は報いられるもので、それは恩寵によってもたらされます。なぜなら、希望を信ずることと神の愛に、我々の人生は基礎を置いているからです。啓示というものは、神が欲する者に示されるものなのですが、我々の信仰について知ることが望ましい数々の秘密の点について明らかにしながら、そのことを明快に示して下さい。そして啓示は一旦与えられると見えなくなり隠れてしまいますが、信仰は聖霊の恩寵によって人生の終わりまで続くものなのです。そして、このように目標に達するまで、啓示によって神が意図しているものは信仰以外のなにものでもない、と思われるのです。

## 8

これまでに述べた事柄の要約、およびそれが彼女に示されたのはいかに広く皆のためであるか——  
8章。

私は頭から大量の血が流れ出て来る光景を見ている間、「主をほめ讃えよ」という言葉が心から離れませんでした。この啓示の中で、私は6つの事柄を理解しました。第1には、ありがたき受難と貴重なる血の大量出血のあかし。第2には、立派な母である乙女。第3には、過去においても現在においても将来においても、すべての力、すべての英知、すべての愛であるありがたき神性。第4は、神が造りたもうたもの。私は天国や地上、そして造られたものすべてが数多く巨大で美しく善きものであることは十分に承知しておりますが、造られたものが私の目になぜそのような小さなものとして見えたかという、すべてを造られた方の御前で目にしたからなのです。すべての造り主を見る魂にとっては、造られたすべてのものはまったく小さなものに見えるのです。第5には、愛のためにすべてをお造りになったお方。その同じ愛で未来永劫にわたってすべてが養われ続けているのです。第6には、私の目には神は善きもののすべてであり、あらゆるものが持つ善は神自身であること。我らが主はこれらすべてを第1の啓示で、ゆっくりと見つめることができるように私に示して下さいました。そして具体的な光景が止むと、私の心に霊的な光景が残りました。そして私は敬虔な畏れとともに、目にしたこと喜びながら待ちました。そしてできるのなら、もしそれが神のご意向なら、さらに見たい、さもなければ同じものでよいからもっとじっくりと見たいと願いました。そうしていると、私の心には同胞のキリスト教徒たちへの愛が湧き起り、私が目にしたものと同じものを皆が見て知ることができればと思いました。なぜならそうすれば皆の慰めにもなると思ったからです。この光景は広く皆のために示されたのですから。それから私はそばにいてくれた者たちに申しました。「今日が私の最後の審判の日です」そしてそう言ったのは、自分が死ぬと思ったからです。なぜなら、私の理解によれば、人は死ぬ日には永遠の審判を受けるからです。こう申し上げるのは、私は皆に神をよりよく愛していただき、私の例を戒めとして人生は短いということを忘れずにいてほしかったからです。というのも、この間中ずっと自分は死ぬのだと思っはおりながらも、不思議でちょっと嫌な心持ちがしておりました。なぜかという、この幻視は生きるべき者に示されるものだったからです。こう私が申し上げますのは、同胞のキリスト者皆のためになるからです。なぜならこの霊的な啓示で、私は神がそう思し召していらっしゃるということ学んだからです。ですから私は神かけて皆様をお願いいたします。どうかご自身のために、この啓示が示された取るに足らない者を見つめるのをお止めになり、力強く、賢く、虚心に神をお見つけ下さいませよう。神は近い愛と尽きることのない善性から広く我々皆の慰めのためにそれをお示しになったのですから。なぜなら、この啓示を、あなた方皆にイエスが示されたままに、大きな喜びと満足をもって、あなた方が受け入れることこそが神のご意向なのですから。

## 9

**聖なる教会の教えを常に守るこの女性の謙虚さについて、そして神のために同胞のキリスト者を愛する者がいかにすべてのものを愛することとなるか——第9章。**

啓示を見たからといって、私が優れているということではありません。私がそれゆえによりよく神を愛するようになるのであれば、あなた方がよりよく神を愛するのであれば、それは私のために



なるのではなく、あなた方自身のためなのです。私はこれを賢者に説いているのではありません。そのような方はこのことをよく心得ているものなのです。安らぎと慰めを容易に得ることができる素朴なあなた方に、私はこれを申しているのです。なぜなら我々の慰めはひとつであるからです。というのも実のところ、神は恩寵を受けている中でも最も取るに足りない者よりも、より一層私を愛している、とお示しになったわけではないのです。なぜなら、決して啓示や幻視を目にしたことがなく、聖なる教会の一般的な教えしか知らない人々でも、私などよりもよりよく神を愛している方が大勢いることを私はよく承知しているのですから。というのも、よくよく自分自身を見つめてみれば、私はただの無に過ぎません。ですが、広く希望は持っています。すべての同胞のキリスト教徒と神への愛でひとつになることに。なぜならば、この合一に救われる人類すべての行く末がかかっているからです。つまり、私の目には神はすべての善であり、神はあらゆるものをお造りになり、神は造られたものすべてを愛しておられ、神のために同胞のキリスト者をすべて広く愛するものは、存在するものすべてを愛することとなるからです。というのも、救われるべき人類にすべてが込められているからです。すなわち、造られたものすべてと、すべての造り主とが。つまり、人の中には神がいっしょに、そして神はすべての中にいっしょにいます。こうして、神を見つめるものは神の恩寵によって真の教えを授かり、慰めが必要ならば力強く慰められることを、私は望みます。私は救われるべき人々について申し上げていますが、それはこの時に神は私に他のものは何もお示しにならなかったからです。ですが、私は聖なる教会が信じ、教え、布教していることを信じております。なぜなら、私がそれまでに理解し、できれば神の恩寵を得て喜んで守り続けていきたいと考える聖なる教会の教えは、常に私の視野にありましたし、それに反するようなものはけっして何も受け入れるつもりは毛頭ありませんでした。こういった心持ちで、私は啓示を一心に見つめました。なぜなら、このありがたき啓示に私は神のひとつのお心づもりを見て取ったからです。このことは3つのものによって示されました。すなわち、具体的な光景と、私の心の中に形作られた言葉と、そして霊的な光景です。ですが、霊的な光景については、分かりやすく十分に申し上げたいとは思うものの、残念ながら私はそうする力量を持ち合わせてはおりません。ですが、全能なる神が、神の善から、そしてまたあなた方への愛のために、私が申し上げるよりも一層霊的にまたより甘美に、霊的な光景を授けて下さることを疑ってはおりません。

## 10

**第2の啓示は、キリストの顔色の様相など、我々の贖罪、聖顔像の顔色の变化、そして我々が神を懸命に請い求め、神を絶えず待望し神を強く信ずることがいかに神の思し召しにかなうか、について——10章。**

そしてこの後、私は私の前に下げられずと見つめていた十字架の表に、受難の一部を肉体的なお姿で目にしました。軽蔑、唾棄、汚辱、殴打、そして多くの堪え難き痛み、口にするとのはばかられます。そしてしばしば顔の色が変わりました。そしてある時には、耳のところから顔の真ん中までの半分が乾いた血で覆われ、その後にはもう一方の半分が同様に覆われ、その間にはもとの

半分からは血が消えていました。これを私は肉の姿で目にしました。悲しげで判然とはせずに。そして私は肉的なお姿をもっとはっきりと見たいと願いました。すると私の心の中に返答がありました。「もし神が汝にもっと示すことを欲するのであれば、神は汝の光となるであろう。汝が必要とするのは神のみなり」なぜなら、私は神を見、神を求めました。我々は今、とても盲目で愚かなため、神がその善性から我々にお姿をお示しになるまで、決して神を求めないからです。そして我々は神をゆったりとした心持ちで見るとすべきなのです。そうすればその心持ちに突き動かされ、我々は神をもっと幸福に見たいというより大きな願いによって神を求めます。そしてこのように私は神を見、神を求め、神を得、そしてまた神を欲しました。そしてこれが、またそうあるべきなのですが、私が思うに、我々に共通の神の求め方なのです。ある時、私の心は海底深くへと導かれました。そしてそこで、難破船や砂と共に、緑の丘や谷を目にしました。あたかもこけが繁っているかのようでした。そして私は次のように理解しました。もし人が大海の底に沈んでも、もしそこで神のお姿を目にすることができれば、なぜなら神は人と共にあるものなのですから、その人は心も体も無事で、そして何のけがもないはずで、そして神は海水のように全てを包み込んでおられるのですから、その人はこの世の全てをもつてしても計り知ることのできないような慰めと安堵を得るはずで、なぜなら、神は我々が神を絶えず見続けることを信ずるようにと欲しておられ、それは我々には些細なことに見えるかもしれませんが、この信仰を通じて神は我々がとこしえに恩寵を得られるようにして下さるものなのです。神は見つめられ、求められ、待望され、信頼されるようにと欲しておられるのですから。この第2の啓示は、とても普通でとても短く、またとても単純であったので、私の精神は嘆き、おののき、渴望しながら、凝視するのが大変でした。なぜなら、私は時としてそれが本当に啓示なのかと疑ったからです。それから我々が主は幾度かもっと幻視を見せて下さり、そしてやっと私は本当に啓示だと分かりました。それは、美しく輝く幸いなる我々の主が、我々のよこしまな行いの皮を被った姿であり、似姿だったのです。このことが、我らの主が自らのご意志で死に向かい、しばしば顔色を変えながら困難な受難の際に自らのお顔をお写しになった聖なるローマの聖顔像のことを私に思い起こさせました。この肖像の、茶色さや黒さ、悲しみに満ちやせ細った様子を、どうしてそうなのであろうかと多くの者が訝ります。主が、天上の美しさであり、地上の花であり、処女の果実であるありがたいお顔で自ら写されたことを考えれば。ではなぜ、この肖像はこのように色彩に乏しく、美から遠いものなのでしょう。私は神の恩寵によって理解したように申し上げたいのです。私は、聖なる教会の教えと説教を通じて、ありがたき三一神が人間を三一神に合わせた似姿にお造りになったことを信仰において知っており、信じています。同様に、我々は、人が罪のためにとっても深く惨めに墮落すると、人を救済できるものは人をお造りになった方以外にはない、ということも知っております。そして、愛のために人をお造りになった方が、その同じ愛によって人を同じ恵みへ、あふれんばかりの恵みへと回復させて下さるのです。我々が初めて造られた時に、三位一体神に似せて造られたように、我々の造り主は、我々が天上で永遠に我々の再生によって、救い主であるイエスキリストのようであることを望んでおられます。そしてこれら2つのあいだで、キリストは人間への愛と人の誉れのために、この死すべき生における人のように自らをなすことを欲したのです。罪を犯さずとも逃れようのない我々の醜さと惨めさにおいて。この意味するところは、以前に申し上げたことと同じです。それは、美しく輝くありがたき我々の神がその中に潜んでいる、黒くよこしまな我々の行いの皮を被った姿であり、似姿なのです。しかし、

声を大にして申し上げますし、我々はそう信ずるべきなのですが、労苦と悲しみと受難によって亡くなっていく際に、そのお方の顔色が変わるまで、そのように美しいお方はその方を除いて一人もありませんでした。このことについては、この似姿を更に扱う第8の啓示においてもっと述べられます。そしてそこでは、ローマの聖顔像について述べられますが、第8の啓示に述べられているように、たびたびお顔の色が変わり、時に健やかでお元気なこともあれば、時に消沈し死に直面した表情を示されるのです。そしてこの幻視は私の心に、絶えず魂を追い求めることが大いに神の思し召しにかなうということを教えてくださいました。なぜなら、それには求め苦悩し信ずることだけしか方法がないのですが、これは聖霊によってそれを許された魂だけに組み入れられているものなのです。そして、見いだされるものの明快さは、神の欲する時に、特別な恩寵によってもたらされるものなのです。信念と希望と愛をもって求めることが我らが主を喜ばせます。そして見いだしたことが魂を喜ばせ、喜びであふれさせます。そしてこのように、魂が苦悶することを神がお許しになっている際には、求めることは観想することと同じく善である、と私の心に教えられました。我々が神を観想するまで神を求める、というのが神のご意志です。なぜならそうすることによって、神が欲する時に神は我々に特別な恩寵によってお姿を示して下さるからです。そして、いかにして魂が神を得るかについては、神が自ら教えて下さいます。そしてそれが、神にとっての大変な誉れであり、あなた自身のためになり、また聖霊の恩寵とお導きによって多くの謙遜と徳を授かることとなるのです。なぜなら、求めることによって、あるいは観想によって、大いなる信頼を持って神のみにすがろうとする魂にとっては、神がそうして下さることが、私の考えでは、一番の誉れなのです。これらが、この幻視の中に見て取れる2つの働きなのです。ひとつが求めること。もうひとつが観想すること。求めることは普通に行われます。いかなる魂も神の恩寵によってそうすることができますし、聖なる教会の判断と教えを仰ぐべきです。求める際には、3つの構えをすべきであるというのが神のご意志です。第1に、神の恩寵なのですから、一心に熱心に躊躇なく求めること。いわれなき重苦しさや無益な悲しみを持たず、喜々として快活に。第2には、心して神の愛を受けるために、神に対し不平を漏らしたり反抗したりせず、人生の終わりまで神をお待ち申し上げること。なぜなら、我々の人生は短いのですから。第3には断固たる信仰を持って神を信じること。それが神のご意志なのですから。我々は神が、神を愛する者たち皆に突然ありがたく姿を見せて下さることを存じています。なぜなら神の働きは隠れたものであり、神は看取されることを望んでおられ、お姿をお見せになるときは出し抜けです。そして神は信頼されることを望んでおられます。なぜなら、神は慈悲深く近いお方なのですから。——神が称えられますように。

## 11

**第三の啓示など、いかに神が決して目的を変えることなく罪を除いたすべてを行うか。それは神がすべてを全き善のうちにお造りになったから——11章。**

そしてその後、私はほんの一瞬神を見ました。つまり、私の理解によると、その光景に神がすべての中におられるということを見て取りました。注意して見つめ、神の御前で静かな畏れを感じなが

ら考えました。「罪とは何か」と。なぜかという、どんなに些細なことであろうと、すべてを神がなされる、ということを実に理解したからでした。たまたまなされる、勝手気ままになされることは何もない、すべては先見の明ある神の摂理によってなされるのだ、ということを実に悟ったのでした。人の目には、たまたま、あるいは偶然と映ることがあるとしても、それは我々の側の無知蒙昧さ、不明によるものです。先見の明ある神の摂理による物事は、正しく立派に、天地創造以前から連綿と、最良の結果となるように神が導いているわけですが、我々には突然訪れるのです、まったく気付かずに。ですから、無知で先見の明に欠けるがために、我々には偶然や気まぐれと見えてしまいます。ですが、我々が主、神にとってはそうではありません。ですから、行われることはすべて善としてなされる、ということを実に認めざるを得ません。我々の主、神がすべてを為されるのですから。というのも、この時には人間の働きは示されず、人間の中で我々の主がどのように働かれるか、が示されたのですから。それは、神があらゆることを中心におられ、神が為さることすべての中心におられる、ということであり、私は神が罪を為さないということを実に確信しました。そしてここに、罪という行いはない、ということを実にまじまじと理解しました。なぜなら、このことすべてにおいて罪は示されなかったのですから。そして私はもはやこのことに疑念を持たず、我々が主を、主がお示しになられることを、凝視しました。このようにして、その時としてはできる限り、神の御業の正しさが私の魂に示されました。神の義しさには二つの美点があります。それは正しく十全である、ということであり、我々が主、神の御業もまたすべてそうなのです。正しさには慈悲の働きも、恵みの働きも必要ありません。なぜなら、すべてが正しく、そこにはなににも欠けるものがないからです。そして、改めて申し述べますが、神は罪をあるがままに見つめる啓示をまた別の機会に見せて下さり、そちらで神は慈悲と恵みの働きを用いておられます。この幻視は、私が思うには、我々が主が私の魂を、まことに主を見つめること、そして広く主のあらゆる御業を見つめること、に向かわせるために見せられたのです。なぜなら主の御業は最善であり、主のあらゆる行いは優しく慈悲深いもので、さらに、人の蒙昧な判断を見つめるようになっている魂を、公正で甘美な我々が主なる神のご判断に導き、大いなる優しさへと導くものなのです。なぜならば、人はある行いを善、またある行いを悪と見なしますが、我が主はそのようにはお考えになりません。そもそも存在するものはすべて神がお造りになったものですから、為されたことはみな神の御業の特質を備えているのです。なぜなら、最善の行いがよくなされたとして了解することはたやすいのですが、最善の行いがよくなされ最高のものであるのと同じく、もっともつまらないことも同じようによくなされているのです。すべては神の特質、太古から我が主がお定めになった秩序のうちにあるのです。業を行うのはほかならぬその方お一人だけなのですから。私は神がいかなるものに対しても目的を変更することがなく、未来永劫にわたって不変であるということを実にしっかりと見てとりました。神の全きお定めには、神にとって未知なものなど太古から存在しなかったのですし、ですから、創造が行われる以前から未来永劫にわたってすべてが秩序正しく整えられていました。そして、この点を外れるものは何もありません。神はすべてを全き善のうちにお造りになったのですから。よって神聖な三一神は常に神の御業にとても満足しておられます。そして神はこのすべてを、とても満足してお示しになり、次のようにおっしゃっておられるかのようでした。「見よ、私が神である。見よ、私はすべてのうちにある。見よ、私がすべてを為す。見よ、私は自らの業から手を引いたこともなければ、今後も未来永劫にわたって手を引くことはない。見よ、私は自らが配した目的に向

けすべてを創造したその同じ力、同じ英知、同じ愛で太古からすべてを導いているのだ。不都合なことなど起こりえようか」こうしてこの啓示において、英知と愛にあふれた中で、力強く私の魂が試されました。すると、大いなる敬意をもって神を称えつつ同意するのがもっともふさわしい、と私には思われました。

## 12

**第4の啓示など。水よりも、主の血で我々の罪を洗い清めることが、いかに神の思し召しにかなうか。なぜなら、神の血はとてもありがたいものだから——12章。**

この後、目を凝らすと、お体のむち打たれた傷からたくさん出血しているのが見え、お美しい肌が柔らかな肉までとても深く裂け、激しいむち打ちの跡がお体中にありました。とてもたくさんの熱い血が流れ出し、皮膚も傷口も目にするのができず、ただただ血の海のようなありさまでした。そして滴り落ちそうなところへくると、血は消えてしまっていました。けれども出血はしばらく続き、じっくりと見つめながらよく考えることができるほどでした。そして、出血が大量であったため、もしその時の出血が自然で現実のものであったなら、私のベットを真っ赤な血で染め、辺り一面にあふれているはずだと私には思われました。それから私の心に、あることが浮かびました。神が地上に豊かな水をお造りになったのは我々の役に立つように、我々が苦勞せずに水を用いることができるようにするため、それは神が我々に対して持っている優しい愛のゆえですが、神のありがたき血を我々がとても身近に感じ、その血で我々が罪を洗い流すことを神はより望んでおられるのではないかと。なぜかといえば、お造りになられた液体のうち神が血以上に私たちにお与えになるのを好まれるものはなにもないのですから。というのも、それはもっとも貴重であると同時にもっとも豊富であり、神の善性からのものなのだからです。そして、それこそが我々の本来の姿であり、神のありがたき愛のゆえに血は我々の身近にふんだんに流れているものなのです。我らが主、イエス・キリストのいとありがたき血はまさにもっとも貴重であり、もっとも豊富なものなのです。よろしいですか。キリストの貴重で豊かでいとありがたき血液は地獄へと流れ下り、その一味を焼き尽くし、天の軍勢に属する人々を解放しました。貴重で豊かでいとありがたき血は地の果てまでも覆い尽くし、すべての人の罪を洗い清めんとしています。善き人の、ずっと善き人であった人の、またこれから善き人となる人の。貴重で豊かでいとありがたき血は天国へと、我らが主イエス・キリストのありがたきお体へと登り、そしてお体から流れ出し、さらに我々のために父なる神に祈りを捧げているのです。今もそして必要がある限り。そして永遠に天上で流れ続け、人類の現在と未来永劫にわたる救済を祝福しているのです。未だ来たらぬ人々を待ちながら。

## 13

**第5の啓示は、キリストの受難によって悪魔の誘惑が克服されたこと、それにより我々の喜びは増**

**し、それが悪魔にとっては苦痛となったこと、とこしえに——第13章。**

そしてその後、神はお言葉をお示しになられる前に、私が御心を推し量ることをお許しになり、そして私が目にしたものを、またそこで私の未熟な心が受け止めることができた意味合いの限りを、考えることをお許しになりました。それから神はお声も出さず、唇を動かされることもなく、私の心に次の言葉をお述べになりました。「こうして悪魔は打ち負かされたのである」この言葉を我らが主がおっしゃられたのは、先にお示しになられたありがたき受難を意図してのことでした。ここに我らが主は、自らの受難とは悪魔を克服することである、とお示しになられたのでした。神は、悪魔が今でも托身以前と同じ邪心を持っていることをお示しになり、そして同じように腐心してはいるものの、悪魔はまた同じく、キリストのありがたい受難のおかげをもって救われるべき者たち皆が、見事に彼から逃れて行くのを見つめていることをお示しになりました。そしてそれが悪魔の悲しさであり、悪魔はとても厳しく屈服させられているのです。というのは、神が悪魔に許す行いはすべて我々には喜びとなり、彼にとっては辱めとなり、嘆きとなるからです。そして、悪魔は神が悪行をお許しになっている時でも、悪行を行わない時と同じく多くの悲しみを持つこととなるのです。そしてそれは、悪魔が望むような邪悪な行いを決してなすことができないからなのです。なぜなら、悪魔の力はすべて神の手中にあるからです。ですが、私が思うに、神にはお怒りになって意趣返しをすることなどありません。なぜなら、我らがよき主は常に自らの名誉に配慮していらっしゃるし、救われるべき者たちみなのためになるようにと心を砕いていらっしゃるからです。神は、力と正当性をもって、悪しき者たちに立ち向かいます。それは悪意と狡猾さから悪巧みをし、神の意思に逆らおうと画策する者たちです。また私は、我らが主が悪魔の邪気を嘲笑し、彼の持っていた非力な力さえも無力にすることを目にしました。そして神は、私たちにもそうすることを望んでおられるのです。この様子を目にして私は大笑いをし、そしてそのことが私の周りにいた者たちをも笑わせ、そしてみな笑っていることが私の喜びとなりました。胞胚のキリスト者たちも、私が見たようなものを見たらよかったと私は思いました。そうすれば彼らもみな私といっしょに笑ったでしょう。ですが、私はキリストが笑うのを目にすることはできませんでした。なぜなら、悪魔が打ち負かされたのですから、我々が自らを慰め神を称えて笑うことができるのは分かります。そしてその後、私はキリストが悪魔の悪意を嘲笑するのを見ました。それは私の心を我らが主の中に導くことによって、すなわち内なる真理をお示しになることによって、全く表情を変えずにおこなわれました。なぜかという、私が思うに、それは神の内にある素晴らしい特質であり、それは変わらぬものだからなのです。この後、私は深刻な気持ちになり、言いました。「私は三つのものを目にします。喜び、軽蔑、そして真摯さ。私は悪魔が打ち負かされたという喜びを目にしています。神が悪魔を軽蔑し、悪魔は軽蔑されるべきものであるということを目にします。そして、我らが主イエス・キリストの大いなる真摯さと堪え難き苦行によってなされたありがたき受難と死によって悪魔が克服されているその真摯さを見ます」そして私が、「悪魔は軽蔑される」と言ったのは、つまり神が悪魔を軽蔑するということです。すなわち、今神が悪魔を見ている見方は未来永劫変わらないということなのです。なぜなら、これによって神は、悪魔が挫かれたことをお示しになっているのです。つまりそれが、「悪魔は軽蔑されるべきものである」ということなのです。最後の審判の日に、救われるべき人々みなみなから。そのような人々の慰藉に対して、悪魔はたいそう大きな

妬みを抱いています。つまりその時に、悪魔は自分が救われる人々に対して与えた苦悩や苦難のすべてが、際限なくその人々の喜びを増幅させることになるのを見ることになるからです。そして悪魔がそれらの人々にもたらそうとした苦痛と苦難は、彼とともに永遠に地獄に墮ちることになるのです。

## 14

**第6の啓示は、しもべに報いる神のありがたき恩寵について。それには3つの喜びがある——第14章。**

この後、我らの善き主が申されました。「汝の苦難、とりわけ汝の若さ故の苦難に報いよう」そうしてこの時、私の心は天上へと向かい、我らの主がご自宅で主人役を務めていらっしゃるのを目にしました。立派なしもべや友人みなを厳粛な宴に招いておいででした。その時私が目にしたのは、主が自らのお宅で腰を下ろすこともなく、堂々と采配を振るわれるお姿であり、喜びと歓喜でお宅を満ち、変わることもなき満面喜色のお顔に、無限の愛の言葉で素晴らしい調べを奏でながら、立派なご友人方を終始自らとても親しくとても親切にもてなしくつろがせていらっしゃいました。その神性の栄えあるお顔のお色によって、天国が喜びと至福で満たされました。神は、現世において自らの意思で何らかの方法で神に仕えし者だれしもが、天上で受ける3つの至福をお示しになりました。第1は我らが主である神のありがたき恩寵であり、苦痛から解放された時に手にすることが出来るものです。この恩寵はたいそう気高く非常に有難いもので、他には何もなくとも、自分が満たされているように感ずるものなのです。全ての生きている人間が耐え忍ぶあらゆる苦痛と苦悩も、喜んで神に仕えた一人の者が受けるありがたき恩寵には、比ぶべくもないのではないかと私には思われました。第2は、そのありがたい恩寵は天上の幸いなる人々の目にするとところとなり、神が天上の人々にその者が行った奉仕を知らしめることです。そしてその時、次の例が示されました。もし国王がしもべに感謝の情を示せばその者にとって大きな名誉ではあるが、もし国王がそれを国中に知らしめれば、しもべの名誉は甚だしく増加するものである。第3に、その者が新たに喜ばしく迎え入れられた時と同じように、神の恩寵は永遠に続くものであるということです。そして私は、近しく優しく、次のことが示されるのを目にしました。天上では全ての人の年齢が明らかにされ、その人が自ら好んで神に仕えたこととその期間が報われることとなります。すなわち、好んで惜しみなく自らの若さを神に捧げた者の年齢は大きく報われ、素晴らしい恩寵を受けることとなります。なぜなら、男や女が真実に神に向かう時、その長短にかかわらず、それが一日の奉仕であろうと、終生変わらぬ決意のものであろうと、必ずやその者はこの3つの至福を受けることを私は見たのですから。神を愛する魂が神のこの慈悲深さを目にすればするほど、その者はいっそう歓喜して一生涯をかけて神に仕えるようになるものなのです。

\*本稿は Julian of Norwich(ノリッジのジュリアン)の *Revelation of Love* (愛の啓示) の長いバージョンの試訳である。ジュリアンは 14 世紀末から 15 世紀の初頭に隠遁生活を送った女性であり、彼女の手になる『愛の啓示』は神秘主義の作品に分類されている。

翻訳にあたっては、*Julian of Norwich: A Revelation of Love*. Marion Glasscoe, ed. Univ. of Exeter Press, 1993. および *Showing of Love: Extant Texts and Translation*. Sister Anna Maria Reynolds, C. P. and Julia Bolton Holloway, eds. SISMELE, Edizioni del Galluzzo, 2001. を参照し、British Library, Sloane 2499 Manuscript (すなわち S 写本) に対する翻訳を試みた。ただし S 写本のみでは理解に苦慮する場合は、適宜 Paris, Bibliothèque Nationale, Anglais 40 Manuscript (すなわち P 写本) を参照した。今後、数度に分け、試訳を公表したうえで、よりよい翻訳に仕上げていきたい。なお、短いバージョンの翻訳は、川中なほ子氏によるものが「ノリッジのジュリアン：神の愛の啓示」として、『中世思想原典集成 15：女性の神秘家』（上智大学中世思想研究所 編訳／監修、平凡社、2002 年）に収められている（pp. 839-890）。

また、本稿は第 2 章からの訳になっているが、第 1 章は目次をかねた、全体で 16 の啓示の要約・見出しとなっているため、完訳の後に追加したい。さらに、翻訳にあたってはさまざまな方に助力を乞うているが、その方々に対する謝辞も完訳の折りに記したい。最後に、原本に倣い段落改行は行っていない。現代の読者には馴染みのないことかもしれないが、御寛恕いただきたい。